

科学技術の潮流

JST研究開発戦略センター

(222)

新たな運動

「科学が問題を抱えている」。これは科学力低下が指摘されて久しい日本だけでなく、世界共通に聞かれる懸念である。どうすれば科学に効果的な投資を行い、成果が社会に還元される好循環を作っているのか。資金配分のあり方、学術情報の流通、評価の方法、研究者の多様性、研究カルチャーなどの各面で構造的改善が必要だとの認識のもと、「メタサイエンス」という言葉が近年脚光を浴びている。

科学変えるメタサイエンス

メタサイエンスは、科学史・科学哲学などの「科学をメタに記述する学問」という従来の意味から拡大し、科学の営みに対する理解と改善を目指す研究や実践を指す。研究結果が追試で再現できない問題の顕在化、何千万の研究者も参加した23年のサイエンスの看板を取る若手研究者の活動が、各国の政策も、メタ環境の改善を目指す企業などを自ら立ち上げ

変革の旗印に

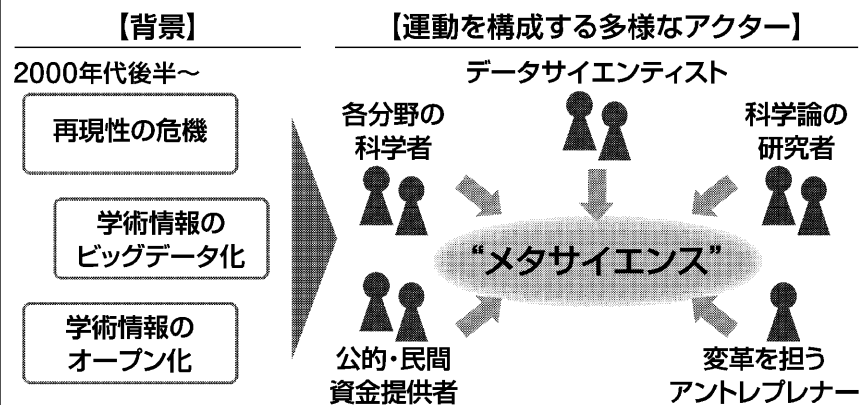


科学技術振興機構(JST)研究開発戦略センター
フェロー
丸山隆一

東京工業大学総合理工学研究科修士課程修了(理論神経科学)。出版社勤務を経て20年より現職。科学技術イノベーション政策についての調査業務に従事。

もの論文を分析する書(DC)には、各国から国立科学財団(NSF)や英国研究・イノベーションを広く利用可能者に加え資金配分機関(UKRI)は今秋、相次いで関連する施策を発表

メタサイエンス運動:科学の営みの理解と改善を目指す研究と実践



JST-CRDSコラム「メタサイエンスとは何か」～「営みとしての科学」を理解し、よりよく変えていく研究・実践の胎動～より <https://www.jst.go.jp/crds/column/kaisetsu/column75.html>

物理学者で著書「オ年、政策的な取り組みそのコミュニティを作る重要性を訴えた。科学の現状に関する知見を基に、政府や研究機関だけでなくアントレプレナーたちがおのおの改善に取り組む。このダイナミズムがメタサイエンス運動をより立てている。科学そのものを研究し、科学をメタに捉える試みは古くから存在した。今般のメタサイエンス運動は、今日の科学がそうした知恵の統合を必要としていることを映し出す。日本でも、科学をよりよく変えるための知恵と人を結集させる旗印として「メタサイエンス」を活用する余地は大いにあるだろう。

(金曜日)に掲載